

大地に生きる

― 新田を開拓した大島清兵衛と村を支えた人々 ―

今から二百五十年前、杉戸町には安戸沼やすとぬまや倉松沼くらまつぬまとよばれる大きな沼があった。広さは約百二十ヘクタール、水深は深いところで一、八メートルもある。当時、江戸幕府は米の生産をふやすため、荒地や沼を田に変える新田開発に力を注いでいた。そのため、この辺りの荒地や沼もほとんどが開拓されていた。しかし、安戸沼だけは排水がむずかしいという理由で他の沼が開拓されてから六十年もの間、取り残されていた。そのような中で、この沼の開拓をしたいと幕府に申し出た一人が大島清兵衛だった。清兵衛はすぐれた土木技術をもった誠実な男であった。



ある日、清兵衛のところに幕府から開拓許可きよかの書状が届いた。胸の高鳴りを押さえながら封を切り、一文一文かみしめながら読んだ清兵衛

は、「よし、やるぞ。今まで学んできた設計技術や土木技術を存分に生かして、あの沼を田に変えてみせる。そして、村人といっしょにあの土地を豊かにしよう。」
清兵衛はにぎりこぶしに力が入ってくるのを感じた。



清兵衛の設計図をもとに村人たちは焼け付くような日照りの暑さの中、そして、冬のきびしい北風が吹きすさぶ中に手をこすりながらどろをほり上げ、悪水を流す堀をつくった。安戸沼の開拓をはじめから十二年、ようやく田ができあがり、いねも実りはじめた。



図面と向き合い、考えたが、問題の解決さくは見つからなかつた。夜が明けているのが分かつた。「もう一度、出だしにもどつて考えるところ。」

そんな秋の晩のことだつた。しばらく長雨が続けていたので開拓途中の新田のことを気にとめながら、清兵衛は一人書齋で本を読んでいた。そこへいきなり表戸をトントントントンとたたきながら、息をきらした村の若い衆がかけこんできた。

「清兵衛さん、大変です。田が水びたしになっています。」

初めは、耳を疑つた清兵衛であつたが、急いで服を着がえると外へとび出した。雨足が強く足下が見にくいあぜ道を急いだ。しばらく行くと、ちようちんの明けかりでなんとか辺りを見渡せる場所に着いた。すると、目の前は黄金色に実つていたはずのいねが水の中にどっぷりかかり、まるで海原をながめているようだつた。

「なんてことだ。」

かたの力がガクツとぬけ、清兵衛はその場にただぼうぜんと立ちすくんだ。今までの村の若い衆の苦労を考えると、胸が張りさけそうだつた。この収穫寸前でやられるなんて。清兵衛の頭には、汗まみれになり杓子をふり上げて働いている村の若い衆の顔が浮かんできた。村人達に申しわけない。こんなはずではなかつた。清兵衛は自分の部屋にもどり、どこに問題があつたのかももう一度考え直すために設計図を開いた。

「大雨になると下流の水が上流に逆流するとは、どうしたことだ。」

清兵衛はこの土地の低さを改めて痛感した。シーンと静まりかえり、雨音だけがなんとかしろというように耳についた。夜ふけまで一人り、雨音だけが見つからなかつた。雨戸を開けると、もう雨があがり白々と



落とし堀に流せば、水は低い方へ流れる。清兵衛は胸につかえているものがストーンと落ちる気がした。

さっそく村の寄合いを開いた。そして、村人達に自分の設計のいたらなさで迷惑をかけていることをあやまつてから説明を始めた。村の衆にも苦勞をかけることをすまないと考えている清兵衛の気持ち痛みほど伝わってきた。そして、清兵衛の新田開拓に寄せる思いを感じた村人は、全員一致で快く次の計画をしようたくし、開拓を続けようと誓いあった。

それからというもの、村人達は来る日も来る日も水路を作る作業を続けた。朝から晩まで沼に入り、どろをすくいあげては杓子の背でペタペタ音を立てて堀の土手をつくる。沼地なのですくってもすくっても元にもどつてしまい、水のようなどろを一日中すくい続ける。これを三日も続ければ腰と腕がガクガクになるほどの重労働だ。



それからというもの清兵衛は田に行つて自分の足で測量をしたり、書齋にもどつては本で調べたりと毎日、田と書齋の往復だった。しかし、なかなか解決さくも見つからずにいた。村の若者頭の篠崎平九郎は、「清兵衛さん、どんなことでも言いつけてください。わたしらはどんなことをしても開拓したいのです。わたしらにはこの土地しかないのです。清兵衛さんおたのみします。」と、清兵衛と共に新田を開拓する意気ごみをみせた。清兵衛も「ここまできては、もう一歩も引けない。村のために頑張らねば。この人たちの思いにこたえなくては。」と、ねるのもおしんで設計図に向かった。そして、一ヶ月が過ぎたころ、清兵衛はようやく逆流を防ぐさくを考えついた。「そうだ、逆流を防ぐには堰を作ればよいのだ。」

しかし、弱音をばく者は一人としていなかった。村人達はみな清兵衛を信じ、自分たちの村をなんとかしたいという思いで村が一つにまとまっていくのを感じていたからだ。



それから十三年、清兵衛をはじめ村の人々は休むことなくはげましあい、いたわりあいながらも働き続けた。そして、やっと悪水に悩まされていた安戸沼が新田になった。

「清兵衛さん、ついにわたしらの夢がかないましたなあ。」

「これで、わたしらの生活も楽になります。」

「いや、わたしもうれしいのです。みなさんのお力なしでは新田にはなりませんでした。この村のためみなさんといっしょに開拓できたことに感謝しております。」

平九郎や村人たちは口々に清兵衛に礼を言い、清兵衛と手を取り合って喜んだ。こうして、田にすることがむずかしいとされていた安戸沼は、大水にも強い新田として生まれ変わったのだ。そして、この新田を清兵衛の名を取って「大島新田」と名づけた。清兵衛のもとに開拓許可が届いてから二十五年目のことであった。

あれから二百年以上たった今も五十戸の農家がこの新田で杉戸産米を作っています。そして、毎年田植えをすませた七月八日（清兵衛の命日）を「清兵衛八日」とよび、今でも大島清兵衛の墓まいりをしているのです。

